

正信偈には、「報化二土正弁立」

和讃には、報の浄土の往生は

おほからずとぞあらわせる

化土にうまるる衆生は

すくなくらずとおしへたり

報土の信者はおほからず

化土の行者はかずおほし

自力の菩提かなわねば

久遠劫より流転せり

こんな明文をどんな読み方をしているのだろうか。自分達は素直に他力不思議の信仰に入

れさして貰っていると自惚れている為に、化土なんてな事は夢にも考えていないのだ。雑行

も雑修も自力の心も疑いの心も、学問としては知っておらるるかも知れないが、実地となつ

たら自分の実機さえも知らないのだから御気の毒なものだ。

船に乗れば大海は渡れると知ってもおり、信じてもいるけれども、乗る事を忘れて
ら渡れないのだ。食物を食べれば飢えは凌げると知ってもおり信じてもおるけれども、食
る事を忘れているから空腹なのだ。着物を着れば寒さを凌げると知ってもおり信じてもおる
けれども、着る事を忘れているから震えているのだ。電灯を点ければ明るくなると知っても
おり信じてもおるけれども、点ける事を忘れているから晴れていないのだ。

しんしゅう どうぞく

がってん

しんこう

おも

すなお

き

ねこ

かむ

たりき

しんこう

真宗の道俗は、合点したのを信仰と思って素直に聞けく と猫を冠るのを他力の信仰の

ように思っているけれども、自分が邪見憍慢の悪衆生とも、自分が逆謗の屍とも知らず
に、素直な者と自惚れているのだから、幾万劫を過ぎ去ったとて、第十八願の信樂開発まで
出れるものかい。そんなに素直に聞く位なら、三世の諸仏が愛想つかされたり、八千遍の
御苦勞を要したり、十八願から唯除逆謗と捨てられたり、祖師から難中の難と叱られるも

のかい。

第十八願は絶対の他力不思議でその境地に一朝一夕で入る事が出来ない程自力の機執に閉ざされているから、それを育て上げる為に八万の法蔵を説かれ、それを觀無量寿經に置み、阿弥陀經に納め、大無量寿經で一体に成そうとさるるので、その釈尊は弥陀の誓願の真髓を見究められての説法であるから、觀經の定散二善三福九品は第十九願の修諸功德の開設であり、小經の嫌貶開示の説法は第二十願の植諸徳本の開設であり、大經の仏の正覺と衆生の往生とは、第十八願の若不生者不取正覺の念力の開示であるから、八万の法蔵も三經の開示も、三願転入の方便より真実に歸せしめんが為である。

然れば直ちに第十八願に歸入する事が出来ないから第十九、第二十の方便に入れて調熟して、真実に融入しようとするのが二尊の目的である。して見れば真実なる者は少なく、方便の桁にいる者は多い道理である。方便の桁とは、諸善万行の域を離れ切らず、又折角

名号に眼を注ぎながら、自力の機執の去らない人が多いから、これを領解文には雑行雑修と言われ、自力の心とか疑いの心とも教えられて、捨つべき物を指摘して下さつてあるけれども、自分がその域に迷没している事を知らないのだから、自分は専修の行者と思いながら一向専修の他人は殆どいないのだ。原因が開発していないのだから結果の報土が顕る筈がないのだ。

報の浄土の往生は

おほからずとあらはせる

化土にうまるる衆生は

すくなからずとおしへたり

実際、報土往生する人は多くなく、化土に生るる衆生は少くないのだ。

報土の信者はおほからず

化土の行者はかずおほし

自力の菩提かなわねば

久遠劫より流転せり

と、専修せんじゆの行者ぎやうじゃが多おほくないから報土ほうど往生おうじやうの人ひとが殆ほとんどなく、雑修ざつしゆの行者ぎやうじゃばかりだから化土けどに生うまる人ひとばかりだ、と明あきらかに出てでいるではないか。自力じりきの菩提ぼだいとは定散じやうさん自力じりきの心こころを指さしているのだから、その機執きしゆうを離はなれ切きらないから流転るてんの絆きずなを截たつ事ことが出来できないのだと厳きびしいご意見いけんである。

道俗どうぞくよ!! 化土けどは自力じりきで行いくのだから難むづかしい、報土ほうどは他力たうりきで行いくのだから易やすいという考かんがえは、全然ぜんぜん誤りである事ことを改あらためなければならぬぞ。方便ほうべんの化土けどが難むづかしくて報土ほうどの真実しんじつが易やすいと言いうなら、何なにを好このんで難むづかしい方便ほうべんを説とく必要ひつようがあるのだ。終極しゆうきよくの目的もくてきが真実しんじつの絶対ぜったい他力たうりきであつて、その極致きよくちに到達とうたつせしむる方便ほうべんが第だい十九、第二十であるから、方便ほうべんに止とどまるものが多おほく、第だい十八願がんの極致きよくちが少すくないのが当然とうぜんではないか。だのに第だい十九、第だい二十は自力じりきだから難むづかしい、第だい十八は他力たうりきだから易やすいと、他力たうりきの言葉ことばに誤魔化ごまかされて他力たうりき不思議ふしぎに生いかさるることを忘わすれ、名号みやうごうに向むかえば皆みな第だい十八願がんの行者ぎやうじゃのようになつて、法ほうの尊高そんこうを仰あおげ、成就じやうじゆの本願ほんがんを聞き

け、願行具足、機法一体、死にさえすれば往生と向こうばかり眺めさしているのは、明ら
かに第二十願の万行超過の相ではないか。いかに法の御手元に成就されてあつても機受の
信相がなくて誰が助かるのだ。死後の往生を夢見ているが、それは結果ではないか。原因が
開発していないのに五十二段が超証さる筈がないではないか。真宗の道俗は初めから信後
の話を聞いて有難がつているが、話している人も信前にいて信後の真似をさし、聞いている
人も信前の入口にいながら信後の積りで聞いているのだから、猿に袴を着せたよりも変なも
のになっているよ。五十年聞いても七十年聞いても大満足の出来ないのは当然なのだ。自分
の心を抜きにして宗教を聞いているのだから開発する筈がないよ。受取る機がお留守に成っ
ていてではないか。機法一体に成就された事を聞けと言っているが、成就されたのは十劫の
昔で、今の苦悩を今晴らされなくては、信念冥合の機法一体が成就されないではないか。
機受の信相がなければ無帰命安心だから、決定心のないのは当然なのだ。決定心の無い者

が報土往生が望めるものかい。

自力を自力と知らないで、自力を働かしている事を知らない

いのだ。他力不思議で開発さされ、水際鮮やかに十方法界を全領するまでは悉く自力の機執

が離れてはいないのだ。離れていない人が往生するのは皆化土なのだ。本人は報土往生と

自惚れているだろうが、一念抜きの後続の報謝だから浄土真宗ではないのだ。浄土真宗でな

い者が報土往生が望めるものかい。

一代諸教の信よりも

弘願の信楽なほかたし

難中之難とときたまひ

無過斯難とのべたまふ

真実信心うることは

末法濁世にまれなりと

恒沙の諸仏の証誠に

えがたきほどをあらわせり

罪福ふかく信じつつ

善本修習するひとは

疑心ぎしんの善人ぜんにんなるゆえに

方便化土ほうべんけどにとまるなり

仏智ぶつちの不思議ふしぎを疑惑ぎわくして

罪福信ざいふくしんじ善本ぜんほんを

修しゅうして浄土じょうどをねがふひと

胎生たいしょうといふときたまふ